

雑 録

東 亞 キ ハ ダ 屬 (Phellodendron)

小 泉 源 一

- I. 花序は大なる繖房形複總狀なり、故に一見 *Evodia* 屬の如し、花は比較的小なり。
- 1, 小葉は大形長サ 20 cm. 幅 9 cm. に達す……………Phellodendron macrophyllum
- 2, 小葉は小形長サ 9 cm. 幅 4 cm. 位なり……………Phellodendron Wilsonii
- II. 花序は小形簇集円錐花序なり、花は比較的大なり。
- 1, 花序の花、果序の果は各相密集す。
- * 小葉の兩縁は平行し上面少しく光澤あり……………Phellodendron chinense
- * 小葉は披針形、上面光澤あり……………Phellodendron Fargesii
- 2, 花序の花、果序の果は相離隔して密集せず。
- * 小葉の下面には密毛を生ずるか少くとも葉脈に沿ひ密毛あり……………
……………Phellodendron japonicum
- * 小葉の下面は無毛、唯中助の基部下面のみ有毛なり。
- △, 樹皮及古き枝皮は非常に厚い木栓を生ず、小葉の縁邊は柔毛を生じ、
中助基部の毛は頗る密毛なり、果序には少しく毛あり……………
……………Phellodendron amurense
- △, 木栓は非常に厚からず、小葉の縁邊は無毛又は少しく柔毛を生ず、中
助基部の毛は密ならず、果序の毛は一般に多し……………
……………Phellodendron sachalinense
- 1, *Phellodendron macrophyllum* DODE. 支那: 四川省
- 2, *Phellodendron Wilsonii* HAYAT. et KANEH. 臺灣
- 3, *Phellodendron chinense* C. K. SCHN. (*P. sinense* DODE.)
北支那、西支那、湖北省
- 4, *Phellodendron Fargesii* DODE. 四川省
- 5, *Phellodendron japonicum* MAXIM. (*P. Lavalleyi* DODE, *P. amurense* var.
Lavalleyi SPRAGUE.) キハダ
- 本種の type は 1862 年 C. J. MAXIMOWICZ 氏富士山にて採りしものにて小葉は廣
卵形、基脚円形、先端は短く漸尖頭、下面密毛あり、然し小葉形は披針狀長楕円形ま
で變り、下面の毛も後には葉脈上のみとなるべし、果實は徑 10 mm. あり、L. A.
DODE 氏の *P. Lavalleyi* の type を巴里博物館にて見るに果實少しく小形、徑 7 mm. な

Jan. 1936.

59

るの他はキハダと何等の差異を認めず、*P. molle* NAKAI は之に似てる。

分布 本土、四國、九州

6. *Phellodendron amurense* RUPR. エゾキハダ

本品は小葉の縁邊は常に柔毛を生ず。

分布 日本、朝鮮、滿洲、沿海州、黑龍江州、東蒙古

7. *Phellodendron sachalinense* (FR. SCHMIDT.) SARGNT. (*P. amurense* var. *sachalinense* FR. SCHMIDT.) シコロキハダ

本種及びエゾキハダは共に中肋の毛は側脈上にも及び縁邊の毛も漸々となくなりて、前者との區別は漸く困難となる、*P. insulare* NAKAI は之に似てる。

分布 樺太、蝦夷、本土、四國、九州

古生植物代末 濠太利にカサイシア要素の存在

小 泉 源 一

古生植物代の終り二疊石炭紀即ち植物歴史の上より云へば石炭紀(上部石炭紀)には地球上に南北の兩植物區系對立せしが、其北半球地域の中にも特に Cathaysia (牧野植物研究雜誌第七卷六號 188 頁參照)は又他の北半球地方と異りて特色ある植物分子を有し、自ら一の區系をなして居た。其特色分子とは *Lobatannularia*, *Cansitheca*, *Emplectopteris*, *Emplectopteridium*, *Nystræmia*, *Tingia*, *Norinia*, *Asterocupulites*, *Pecopteridium*, *Cardioglossum* 等で、それに中生代要素たる *Cladophlebis*, *Pterophyllum*, *Taeniopteris*, *Chiropteris*, *Thinnfeldia*, *Saportea*, *Plagiozamites* 等を混ずる事と、尙古生代の終末なのに末だに *Lepidodendron*, *Sigillaria*, *Calamites*, *Cordaites* 等が残る事である。

此 Cathaysia 石炭紀 Flora をば昔は *Gigantopteris* Flora と呼びしが今は *Gigantopteris* Flora は東亞中生植物代の始の代表名で、石炭紀 Cathaysia Flora は *Lobatannularia* Flora とでも云ふべき事になつたやうである。

Cathaysia Flora は Malaysia 地方にも及び、又印度にも及びし事が考へられてるが、最近意外にも F. W. WHITEHOUSE 氏によれば Queensland にも及んでる事が發見された、即ち此東北濠洲の全紀に於て *Glossopteris* や *Gangamopteris* と云ふ全紀全地方特有要素と共に *Lobatannularia*, *Thinnfeldia*, *Taeniopteris*, *Emplectopteris*, *Cladophlebis*, や Cathaysia の *Sphenophyllum sino-coreanum* に近似せる *S. speciosum* や、*Ginkgoites* か *Baiera* に相違ないと思ふ、*Noeggerathiopsis Hislopi* 等のものを混ずる事がわかつた。

扱て斯うなると、Cathaysia Flora は又濠洲東北方で Gondwana Flora と相混交すると云ふ事になる。